

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

6. 変 化 (翻 訳) その2

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

6. Change

Part 2

後 藤 廣 文

Hirofumi GOTOH

ダンが関心を持った物質の変化は液化だけではなかった。液体から固体に変わることや液体や固体が蒸発して水蒸気にも変わることも知っていたが、自分が分解の危機にひんしている時に関心を持った液体ほどには魅力を感じてはいなかった。『危篤時の信心』では（医師が言ったのだが）彼を死に至らしめようとしている水蒸気について黙想し、単に濃くなっただけの空気なのにそれがいかに致命的になりうるかということに驚いている。これが原因で極端な物質の変化に夢中になって次の一節を書くのである。

もしこれが雷とか砲撃による大気の激しい振動であったとしたら、空気が凝縮して、（さらに振動が激しいと）水が凝縮して氷となって石のようになったりすることがある。それが人を殺すのは不思議なことではない。⁵⁸⁾

これはワーズワスが『叙情民謡集』の序文で、科学者の方法に従って、科学そのものが対象とする事物の真只中に感覚を働かせる詩人達のことを語る時に思い起していたかもしれないような一節である。⁵⁹⁾ 実際英国詩人の中でどんな詩人がこんな境地を切り拓いていたのかワーズワスが考えてもいなかったことは明らかである。しかしダンは拓いたのであるし、爆風の結果について書いたこの一文がその例である。空気が石のように固まり、水が氷に固まる。相反する物質、相反する温度のものが結びつけられている。物理学に感情を詰め込むのである。

蒸発作用にも興味をそそられている。「熱病」では女性の息と共に全世界が蒸発し、「臨終」では恋人達のキスが「二人の魂を吸って、蒸発させる」。息と溜息は詩中では通常の肺の働きとしてではなく、溶解——物質が非物質化していく例——として扱われている。血液は生気を生み出すために働き、天使は空気でその顔と翼を作る。いずれも希薄なものや希薄化するものに同様の関心を示すのである。説教では「蒸発する」魂あるいは身体の中で「息をし、蒸気を発する」魂のことを語ったり、更に専門的に熱せられた時の水銀の蒸発の早さについても述べている。⁶⁰⁾

毒物が発散する有毒ガスにも関心を持った。現代の劇でも本や頭がい骨にキスをしたり、花束の匂いをかぐと決まって死を招くということになっている。「香水」で「らい病やみの娼婦の吐く息」

は吸い込んだら死ぬ一種の毒気と想像されており、「腕輪」の中のダンの呪いの言葉は長期にわたって作用する毒物のもう一つの例を描いたものである。

この次お前がかがんで拾うもののなかには毒があり、
その毒気がたちまちお前の湿った頭を冒す。⁶¹⁾

鼻孔を縫うようにして頭の柔らかい中枢部にたどり着く毒気は『魂の遍歴』のネズミと同じ不快な侵入物であるが、ネズミより敏捷で油断のないいわば気化したネズミなのでネズミよりずっと魅力的である。ダンは最新の毒の文学をものにしていたようで、『偽殉教者』に1606年のフォレストスの『毒について』を引用している。

気化はさまざまな詩中で意図的に表された実体から非実体あるいはその逆の変化によっても示唆されている。魂は肉体から分離し空中に浮かびまた戻る。「美しく輝く無が」肉の手足をつける。生きた女性が夢と混じり合い、夢が生きた女性に具体化される。物質には揮発性もある。錬金術を利用するのは錬金術が変化するものを固定させることができるからであり、錬金術は全ていんちきだと疑っているにもかかわらず錬金術を利用するのは錬金術思想の中に想像力を豊かにしてくれるアイデアがたくさんあるからである。錬金術の思想ではあらゆる物質が魂で満たされており、無限に変化する。物質を溶解し、浄化し、第五元素を抽出し、それを濃縮することができるのは錬金術師である。これらの実験作業を行うためにランビキ、つまり蒸留器が考案されたのである。しかもその蒸留器の球体は物質の変化をとらえることができる小世界なのである。従って、これがなくてはダンの想像力は働かない。更に、蒸留器の中の変化は単に観測できるだけではなく制御することができるのである。つまり、経験という変化するものに自己を適応させようとしているダンにとって、破壊をうながすものが制御に役立つのだから蒸留器は二重に魅力的であった。また、錬金術の専門用語は現実に存在するものを自在に操ることができるので、こういった専門用語を使うことによって自分が解放されるように思えたのである。説教の中で贖罪や魂の救済のような主題について話していると思われる時には錬金術風に厄介な多音節語を使っているのがわかる。

金属を変化させる (“transmutation”) 際にはその金属を煅焼 (“calcination”) ないし液化 (“liquefaction”) (液化させなければならない) させたり、洗淨 (“Ablution”) つまり不純物を取り除いたり、より良い金属にするために変化させるだけでは不十分で蒸発してしまわないように凝固つまりそれを沈殿させなければならない。⁶²⁾

この錬金術への脱線に関してミルトン・ルゴフは「説教でいんちきのようなわけのわからない言葉を使うのはおかしい。」⁶³⁾ と言う。しかし、おかしいことはダンの批評家がおかしいと思うことだ。ダンの説教にはこれに類した一節はたくさんある。-tion で終わる名詞はダンお気に入りの頼りになる言葉で、頼りになると思うのはこれら静止を表すものと信じられている言葉を変化を表すものとして使えるからである。従って、引用の中にある言葉は概して物質の変化(「分解」 fluctuation

「灰化」 incineration 「乾燥」 exsiccation 「老化」 inveteration 「加速」 acceleration) を述べたものである。ダンの説教は宗教に関係するのと全く同じ様に物質が変化して行く状態と大いに関係があるが、それも当然のことで、物質の変化していく状態にダンは生涯心を奪われていたからのである。宗教はそれに比べればほんの時たまにしか心を奪われてはいないのである。

錬金術に夢中になったのは金に関心があったからである。多くのダンの同時代人にとって金は神秘的で不思議なものであり、半ば生きているものでもあった。金は野菜のように地面の中で太陽によって育てられ成長すると信じられていたのである。パラセルサスは地下の金属の鉱脈を地下の水分に根を張りその幹と枝を地表に向かって押し出す「鉱物の木」として語る。⁶⁴⁾ 他の物質も全て金のようになりたいと願っているがそれは太陽の作用によって地中で卑金属が金に変るからだと言錬金術師は教えていた。ダンもこのように卑金属が太陽の作用によってその価値を高められるという考えを持っていた。ダンの地質学に関する知識は純粋に想像力によるものなので主観的であるが、「丸くかたまった金の最大のもは地表ないしは地面に一番近い所にある。そこで金は太陽の熱によって最もよい調合を受けているのだ」⁶⁵⁾ と会衆に告げる。それより下にある不運な金属はみな金のように完全な存在になりたいがる。地下は願いが満たされず騒然となる。「黄金になりたいと願っている良い性質を持った物質」が大地の「腸の奥底」に満ちているのだが天が「その眼で暖める」ことができる地表近くにはないのなら永久にその願いは満たされないのである。⁶⁶⁾

ダンが興味を引かれたのはこの大地の暖かい黄金の腸を想像することだけではない。金を不滅でしかも非常に可塑性に富んでいる金属と見ていたので金そのものにも好奇心を持ったのである。可塑という点では金に勝るものはない。ベッドフォード夫人への書簡詩の中でこの点を賞賛している。

………どんな炎も、錆びも、一ドラムの金でも
損なったり、減らしたりすることなく、そのまま残り、
水にも土にも、塩水にも、空気にも耐えて、
どんなに打ち伸ばしても、少しも傷つくことはない。⁶⁷⁾

このように見ると金は極度の不変と極度の変化とに結びつけられており、金の前途には無限の可能性があったのである。が金そのものは変化することはない。ダンの想像上の人物として金は魅力的で有望な人物であった。金がもし自らの幸運を知っていたらどんな幸運が始まるのか待ちきれなかったことであろう。「金がもし話せ、望むことができたなら、金は暗いところ、鉱脈の中にいることに満足せず、地表に出たがるであろう。」⁶⁸⁾ 詩中で夢中になって金を駆使する。ダンにとって金はイメージの源泉として非常に重要であった。ダンを興奮させた金の属性は金箔を作る時の例に見られるようにその延展性である。『自殺論』の中で少量の金が「その信頼できる粘り強さとその延展性によって他のいかなる金属よりも一万倍延びるであろう」⁶⁹⁾ と説明している。いつものようにこの数字の大きさにダンは誘惑されるのだがこの誇張も現実の金箔製造からすればそれほど驚くべきことではない。この延展性については既に古代においても興味を持って議論されていたのである。ダンもその評価については知っていたと思われるプリニーは一オンスの金は三インチ四方の金箔が七

百五十枚になると考えていた。⁷⁰⁾ 現代の市販用の金箔がこのことを証明しており一オンスの金から三と四分の一インチ四方の金箔千二百枚が出来る。達成できる最小限の厚さは、金の純度や天候状況にもよりはっきりとはわからないが、マーセンが最終的には一オンスの金が百五フィート四方の金箔になると見積もった。これがダンの時代の信じるに足る見積もりであった。ダンの「無限に延びた」という句は限界がないと思いたがっていることを暗示しているのである。金を時間をかけて延ばすと光を通すくらい薄くなり、混ぜる銀の量によって緑色からすみれ色になる。たとえダンが前から物質の変りやすさを重要視していなかったとしてもこれに魅力を感じたのは当然のことであらう。ハンマーで打ち延ばされた金の塊が息で吹き飛ばすような薄い膜や霧のようなものに打ち延ばされるといふ考えはダンの心の中に絶えずあったのである。

恐らく感覚的な喜びに罪の意識を覚えるからであろうが説教では実際にはいつも否定的に使っている。打ち延ばされた金は「磨り減って吹き飛ばされすぐさま無に帰す」と言っている。金箔では金貨にもならない。罪深い性質や「みだらな話し」と結びついたり、「役に立たない、たわいのない想像」や不義と結びついている。⁷¹⁾ にもかかわらず金箔の話は止められない。金箔を見て恐らく思い出したであろうと思われるたわいのない想像が「別れ：嘆くのを禁じて」の恋人達の魂に関する想像である。

それゆえに一つになった二人の魂は
 僕が出て行ったとしても、
 引き裂かれないで、引き伸ばされるだけ
 空気のように薄く延ばされた金箔のように。⁷²⁾

説教での否定するような調子にはここにはない。明らかに魅力的な壊れやすい金属に夢中になっているのである。金箔が魂に似ているという事実は（因みにテルトゥリアヌスも打ち延ばして金箔のように拡大する魂を好んだ⁷³⁾）金箔と魂が極度に薄くなるということの意味することになる。その金箔はしだいに変化して純粋な生気になりそうだ。魂はもはや全くの無形のものではなく、さまざまな大陸に広がるきらきら光る箔に延ばされるのである。後にダンがこれを軽率な想像の一つと居心地の悪さを感じたにしろ感じなかったにしろその基本的な魅力には打ち勝てなかったのである。説教で展開される金箔の道徳的な観点は便宜的なもので一時的な関心でしかない。絶えず心の中にあったのは物質の変化に関するこの壮大な例に繰り返し帰る必要があったということである。

全ての物質は絶えず他のものへと融合していくというダンの流動する世界は多くの犠牲をともなったが、その中に個性という概念があった。人が二日間連続して同じだと思うのは科学的に根拠がないことだとダン実感する。更に、二人の個人的関係としての愛はつかのまの、果てしなく流動するものでしかなくそこには個人は存在しないのだから幻想であると言う。ダンの愛の詩はこうした状況が無頓着に受け入れる時もあるれば、それを嘆き悲しむ時もあり、また「一周年記念」のように挑戦的に否定する時もある。このテーマに全力で取り組んだ詩が「第二周年記念の歌」である。

美を愛していると

お前は言うのか。(美は人の心を打つ最も尊いもの)
 だまされた哀れな詐欺師よ、彼女も
 愛し始めたお前も、どちらももうここにはいない。
 二人は流体で昨日のお前達とは別人。
 昨日の疲れは(病気でなければ)翌日治る。
 (川の名前は変らなくとも)昨日の水は
 今の流れとはまったく違ったものだ。
 彼女の顔も、お前の目も流れるのだ。今やもう
 お前が恋を誓った聖人も、巡礼もいない。
 いつまでも変わらないと思っている間に
 刻々とお前は変化しているのだ。⁷⁴⁾

この詩は穏やかな口調で語られしかも道理にかなっているが、恐ろしくもある。顔の流れる女性、流れる目の男性は熱の放射を受けた人のようだ。ダンの数年前に同じ結論にモンテニューは達しており、すべての人間は絶えず変化し、移動し、一連の物質的存在を影としてしかとらえられないのだから「我々は意思を通じ合わせることはない」と指摘している。「恐らく想いを形にしようとしても水をつかもうとするようなものでしかないであろう。」⁷⁵⁾とモンテニューは言う。ダンはもちろんのことながらモンテニューに心を引かれたことであろう。が、変化のテーマは自分でも既に知っているものしかモンテニューに見ることはできなかった。モンテニューは全てのダンの著作に浸透している一つの意識に客観的な論述をしてくれたのである。

ダンが論理を極め限界にまで推し進めた結果「第二周年記念の歌」を書くことが出来たのである。エリザベス・ドルアリー讃歌としてこの詩を書くためには彼女のような人物がいたことが前提条件となる。しかし、ダンの言うことが正しいとすれば彼女はいなかったことになる。他の人と同じ様に彼女は宇宙の流れの中に消えて行くからである。もちろん、ダンを弁護するためには「第二周年記念の歌」の詩行はただ肉体の変化に関して言っているだけで人間の魂そのものは変化しないままだと答えることはできるであろう。しかし、三年後に「ハリントン卿への挽歌」の中でこの主題にもどった時この区別を守らないで魂は肉体のように流れに巻き込まれることを示して、

...流れ出る美德は見つめることはできないもの、
 注視にたえられないものだからである。
 肉体が変化するように昨年身につけた
 生氣や体液や血液を身につけていないように、
 また、流れ行く水をじっと眺めていても、
 見つめていた滴はすぐにその後から押し寄せてくる
 水に流されて、視界から消え見えなくなるように、

美德の大海においてはどの美德をもじっと

見つめることはできない。川のように美德もながれる。⁷⁶⁾

様々な事に戸惑いながらもハリントン卿の詩をなんとか書きおおせたことは確かだ。事実ある目的のために内なる流動に関して今言ったばかりのことを苦し紛れに撤回しているのである。美德は川のように定まらないのであるが、しかしどうゆうわけか「美德を持っていた人がいたことは永遠に消えない」のである。というかダンが自分に都合よくそう決めたのだ。ダンを責めることはできない。つまり、讃歌の詩を書き続けるには確かに経済的理由があったのである。亡くなったハリントン卿はダンのパトロン、ベッドフォード伯爵夫人ルシーの実弟であったのだ。ダン意識の流れと個性の消失に関する現代的な理論を持っていたのにそれを賞賛の詩の中に持ち込むのは馬の中にジエット・エンジンを持ち込むようなものだ。すばらしいのはダンが何とかやってみようとしたことだ。ダンの独自性が詩をばらばらにしたことではない。

ダンを不誠実だと言わないで、流動する人々への関心がダンの受け継いだ詩に関する考え方をいかに修正させたかと考えた方がより有益であろう。恋愛詩集のように見える『歌とソネット』の大部分は結局は自己の流動性に関わるものだということがわかる。不貞を描くことに夢中になっているだけではなく、愛そのものがいかに早く変化するものなのか、そのために人を互いにもつれさせわずかではあるがその何人かを別れたままにさせていることを見ても詩集の流動性は明らかなことである。このためにいつも暗さがつきまとうだけではなく、おそらくたびたび別れの詩を書くことになったのであろう。多く人は愛する人との別れを経験することによって長続きしないのが自分の性格だったと突然確信するものなのだ。自我が切断されたという印象を持つのである。こういった感情を最も生き生きと再生させたのが「形見」であろう。

この前死んだ時に、いとしい人よ、

君から離れる度に僕は死ぬのだが、

一時間前のことであっても

恋人にはそれは永遠のように思えるのだが、

今でも覚えている

僕が言ったこと、何かを贈ったことを。

僕を贈った僕が死んだとしても、

僕は僕の遺言執行人、形見となれるのだ。

僕は僕が言うのを聞いた。彼女にすぐ伝えよ、

僕自身が、つまり君のことだ、僕ではない、

僕を殺したと。そして死を悟った時

僕が死んだら、僕は君に僕の心臓を贈るように命じた。

だが何と心臓が見当たらない。

僕は僕の胸を裂いて、心臓のあるべきところを捜したのに。
生涯真心を通した僕が最後の遺言で
君をだますことになったということが再び僕を殺した。⁷⁷⁾

これはもちろん苛立ちを表した詩である。ここに使われた代名詞を分類するのに相当時間がかかるがそこがポイントだ。我々読者は話者の話を聞くだけでなくそのまごつきを共有させられるのである。自分をどこかに置き忘れ困惑した話者の姿が混乱した文法に写し出されている。これらの詩行の意味と格闘している時ダンが「ぐるぐる回るようなめまい」と呼び、ペイターが「あの妙な絶えず揺れ動いたり止まったりする自己」と呼ぶものが詩行の中から伝わってくる。自己についてのダンの理論との関係においてのみこの詩が解釈できるのである。詩のみから解釈すれば話者が恋人と別れる度に死ぬというのは正に芝居じみていると我々は感じるであろうが、ダンの思想の内容から考えると全て真面目なもので実際には否定できない詩なのである。

ダンは自己の流動性に関心を持っており、このことが自己が映るもの、特に涙に映ったものにダンが興奮する理由を説明するのに役立つのである。誰か他の人の目から流れ出る涙にあなた自身の複製を見るのは自己の安定と分離に関する考え方を整理し直さなければならないと思うような経験である。同じ様に混乱した自己の実例が「別れ：窓に書かれた僕の名前について」にある。ここではダンは女性に彼女が窓ガラスに映った自分の姿を見ると顔のところに彼の名前があるのが見えると言う。この視覚上の混乱は「ここに君は僕を見る、僕は君なのだから」⁷⁸⁾のようにいかに愛が人をそれぞれのの中に融合させるかということを示している。時のように愛は絶えずその正体を変えるので恋人達は厳密には自らの過去の愛の経験を語ることはできない。誰か他の人のものとなってしまっているからである。

一時間も恋をしていたと言う人がいるならば、
その人はまったくの気違いだ。⁷⁹⁾

一方「一周年記念」で一年愛したとダン自身が言っている。この矛盾はダンに典型的なことだ。つまり、何か安定したものが欲しいと思うのは不安定な感じている時や不安定な感じを抑えようとしている時なのだ。

この種の相互矛盾は『歌とソネット』に特有なものでありこれに悩む研究者もいる。ダンは詩ごとに持論を変えると彼らは抗議する。例えば「恍惚」では愛には身体的な交わりが必要だと言い、「別れ：嘆くのを禁じて」ではその必要性はないと言う。ある時は軽薄だと思つて次では愛情がこもっていてダンの口調は信用できない。神々しい驚きの念を持って女性に語りかける「空気と天使」も結局は女性の愛は男性の愛より劣っているというくだらない冗談で終わっている。奇跡の女性と「骨に巻きつけてある金髪の腕輪」が描かれた「聖遺物」は相手構わず関係を持つ女性に対して不平を言うにふさわしい詩である。

墓も女にならって

一人だけのベッドではなくなった。⁸⁰⁾

こういった一貫性のなさに混乱させられた研究者達は「皮肉な」詩を前に「真面目な詩」を後にして年代順に並べ一貫性をはかろうとしてきた。しかし、こういった並べ方は現実的ではない。大半の詩をいつダンが書いたかを示す証拠はないからである。さらにダンの女性に対する姿勢が少しずつ良くなっているという仮説はダンの変化に対するダン自身が暗示するものとは相反している。

ダンの詩を受け入れやすくするために批評を加えながら二者択一的に並べるのは詩から愛に関する一般的な意見を引き出すことにはなるが、詩に含まれている様々な観点を囲い込むには不十分であいまいである。D.L.ピーターソンはこのやり方に賛成で次のようにダンの哲学を要約する。

彼自身の立場は性に対する欲求は性欲に比例し、それによって人は自由を奪われると推測できるが、…必ずしも自由を奪うものではないということにあるようだ。均衡の感覚を維持することができてかつ自由を維持できる人にとって性は喜びの源となりうる。⁸¹⁾

こういったくだらない陳腐な考えを知って少なくとも将来の研究者はピーターソンの方法を採らないように思い留まるべきだ。もし実際ダンの詩が彼が示唆するように要約できるのであれば明らかに詩を読む意味はないであろう。事実詩に表された一貫性のなさ、疑念の強調はいかなる種類の要約もはばむものである。いかなる「立場」も取っていないのであり包括されることをはばんでいるのである。ダンの詩は思想と熱情が一致しておらず、処理しにくく、体系化できないものを包含したままなのである。A.J.スミスが既に述べているようにそれぞれの人の恋愛に関する様々な経験の違いがその人の愛についての理解力となるので、愛するということには様々な意味がありそのどれ一つを取ってみても唯一のものとはなり得ない⁸²⁾ということを詩は示している。定まらない気ままな詩人の声や無愛想に変わっていく口調は、芸術を通して、芸術に特徴的な経験を乗り越えようとする時におちいりやすい誤りを我々に伝えてくれているのである。同じ時間意識の中にある一致しない要素も故意に放棄されることなく入れられるのである。このことは言葉だけではなく韻律上にも見られる。ダンの韻律には瞬間の圧力を切り抜けるために韻律の規範を強調したり、乗り越えたりしているという感じがある。同じ様に多様な連形式を使って緊急の状況に適応させていることが暗示されている。ダンは全部で四六の違った詩形を使っており、一度以上使っているのは二つしかない。新しい試みには新しい形式が必要とされたのである。

あらゆる人の毎日の生活と同様詩においても一般的に不安定になる原因は思想と感情が一致しないことにある。感傷的な研究者はダンの思索的な要素を嫌い時としてそういう要素はないという振りをする。例えばC.S.ルイスは「熱病」(彼に我慢出来る二つの詩のうちのひとつである)は「音楽と感情の単一の噴出」だと言う。実際のところ一行目の半分を読んだ後もさらに読み続けた人なら誰もこんなことは言わないであろう。「どうか死なないで欲しい」は心からの叫びだと頭に浮かぶが

その後、既に見たように、ダンの頭は深い思索に支配されて考え始める。中途まで進むとはっきりさせないまま三人称の女性に言及するようになる（「しかし熱病で彼女が亡くなるはずがない…」）。この始めの押さえ切れない激しい感情が思想によって絶ち切られることはよくあることだ。「臨終」はもう一つの例である。痛ましくも愛情のこもった始まり（「さあさあ、この最後の悲しいキスもこれまでにしよう」）に続いて思想が慎重に計画してこの状況を救いにやってくる。最終行まで深い感情はそこなわれることなく、表現はきちんと対立を構成している（「二度死んだ。別れて死んで、行けと命じてまた死んだ」）。もちろん対立の構成にしっかりとした固定した規則があるわけではない。これとは違う方向に行く詩を見つけだすことも簡単である。例えば、「面影と夢」においては感情が思想をひっくり返す。最後の二行では頭ではなく心を選ぶ。

あの人への愛に満たされ、僕の心が膨れて気が狂っても、
心を失って白痴となるよりはました。⁸³⁾

これら三つの例に共通するのは変化である。ダンの詩は静止することはなく閉じ込められることもない。始めた時とは違う考えや経験を切り拓いていくので、読んでいる間もずっと説得されているという印象を受ける。タールに汚れたボイラーや砂利を運ぶトラックや鋤に寄りかかる人をよけて通らなければならない新しく延びる道路のように新しい実験的な感じがするのである。

第一次大戦以降の世代の英国の作家や研究者の心に訴えたのはこのダンの変りやすさであった。若きエリオットはダンが「偶然出会った感情に忠実で、その感情が複雑で、急速に変わって対立することを認識している」⁸⁴⁾と賞賛している。同様にオルダス・ハックスリーは心理的リアリズムがダンの作品の「重要かつ独創的な特徴」⁸⁵⁾だということを見出している。ヴァージニア・ウルフはダンは「全体として見栄えの良い完成したものを作り出す同じ様な作品を記録するのではなく類似性を断ち切って矛盾する愛と憎しみと笑いの感情を同時に感じさせてくれる力を果敢に記録したのだ」⁸⁶⁾と賞賛している。こういった批評で強調されているのは変化が世界や彼自身に関する思想において重要だということまでの理解をうながすものではないが、正しく鋭い。ダンが詩について語ることはめったにないのだが、その語り方は詩を過ぎ去っていく一瞬を映し出すすばやい信頼できないものとしてみなしていることを示唆している。手紙に同封した詩を「紙片」とか「ひらめき」とか「蒸発」⁸⁷⁾とかと言ってる。説教で作詩法の概略について一般的なことを話している時でさえ詩は変化して行くものという考え方を持ち続けている。「詩の構造そのものは金の塊を打ち延ばしていくことだが最後の節は刻印のようなもので、それによって流通する」⁸⁸⁾と主張する。最後の強調は特に全面的に詩に当てはめた場合少し誇張して見えるが、ダン自身が固執する変化や詩の始めから終わりへとその題材が発展していくことと合致しており、ダンは詩が終るまでどんなことでも結論づけるのは愚かなことということを示しているのである。

あるいは実のところ結論がでたらということである。というのはダンの詩中の態度の矛盾は自己の内面にある解釈できない混乱と関係があり、ダンの中にある混乱をはっきりと認識できることは多いが、詩の一面を正しい声、他方を間違っていると決め付けて問題を単純化することはできない。

(ジョージ・ハーバートの詩ではそれができることがある。) これら感情を抑えられなくて思いとは逆の言葉を使った詩の例として「幽霊」をあげることができるかもしれない。

ああ、男殺しよ、君に振られて僕が死に、
 そのとき、君が僕の口説きから
 やっと解放されたと思い始めると、
 僕は幽霊となって君のベッドを訪れて、偽の処女の君が
 僕にも劣る男の腕に抱かれているのを見たら、
 君という病める口ソクを震わす。
 君の男はもうすっかり疲れはて、
 男を起こそうと身動きしたり、つねったりしても
 また求めるのかと思い
 タヌキ寝入りをして君に背をむけるだろう。
 無視された君はハコヤナギの葉のように振るえて、
 水銀のような冷たい汗を流し、寝たまま
 死んだ僕より本物らしい幽霊となるだろう。
 その時僕が何と言うかを、今は教えてやらない、
 君を助けることになるから。僕の愛は終わったのだから、
 僕の脅しで君の身を守らせるよりは
 いっそ苦しみ、後悔する方がましなのだ。⁸⁹⁾

この詩は振られた男が相手の女性を人殺しと言い復讐すると脅すというのがペトルルカをまねる者達の取りたがる役という理由でダンの中でもより「ペトルルカ的」詩の一つであると指摘されてきている。セイラフィーノですら死んだら女性にとりついて自分の愛をはばんだ日を呪ってやると女性を脅す詩を書いている。⁹⁰⁾ しかし、「幽霊」とはその劇的構成と機知という点だけでなく首尾一貫していないという点でも違っている。冒頭は明らかに愛に報われなくて死ぬのであるが、終わりでは女性を愛してはいないので彼女に愛してもらい助けてもらおうよりは彼の死後彼女を苦しめたいと彼女に言う。どうしたら愛故に死ねるのか、また、愛なくして死ねるのか？彼女を愛しているのかいないのか？まだ愛していてその愛故に死んで彼女に自分の行為を恥ずかしいと思わせたいというふりをしているのだろうか。それとも彼女によって修復できないほどのダメージを与えられたと主張してその憎しみを正当化するふりをしているのだろうか？それとも本当はまだ彼女を愛しているのだが怒っていて彼女に仕返しをしたくて愛してはいないと言っているのだろうか。それとも口にはできないようなひどいことを言って彼女を脅してその代わりに自分を愛させることができるかもしれないから愛してないと言っているのだろうか。これらの様々の解釈の可能性もこの詩が示唆する様々な選択の対象を全て尽くしているとはいえないが、詩の底流にある複雑な目的を指し示すには充分である。

更に、この詩はこのような様々な解釈を択一的に分けられるようにはなっていない。同時にこのような解釈の全てを包含するので人間の心の動きを単純化して説明すると愛憎のような相反する感情は矛盾とみなさなければならないことに気づく。これに関してホーソーンは『緋文字』の中であえて次のように言っている。

愛と憎しみは本当は同じであるかないかは興味深く観察し研究しなければならない問題だ。どちらも極度に発展すると高度に親しく心の触れ合いを必要とするもので、どちらも相手に愛情と精神生活の糧を与え合うようになるものである。そして、この問題がなくなると情熱的な恋人やそれに劣らず激しい憎しみを抱く人を寂しく孤独にしまうものである。それ故に哲学的に考えるとこの二つの激しい感情は本質的に同じものだ。⁹¹⁾

これは「幽霊」よりは平凡であるが同じ問題について述べたものである。死んでさえもダンは女性につきまとうことを想像するのである。詩のきわどい巧妙な口調は彼女を傷つけるための武器として採られているのかそれとも自分自身の一貫しない気持ちを隠すための防御なのかわからない。風刺とおどけのいずれかがあるいはその両方がダンの意図することにはなっているがどちらがより重要なのか推測が出来ないのだから毎日注意深く眺めて考えることしかない。

「幽霊」は極端な例だが例はこれだけではない。この複雑な態度はダンにあっては普通のことではこれは詩中の変化や矛盾に起因するものである。こういった複雑な態度は解決すべき謎ではなく日常生活のように自然に起こる解釈できないものである。当然のことながら複雑な態度を見せる人は我々を寄せ付けず、我々も近づかない。また、そうゆう人と一緒にいても胸を開かせてその胸の内にあるものをはっきりさせられる可能性もない。我々には推測するしかなく、我々自身の経験以外に方法はない。その複雑さを理解しようとするれば思考が分裂するという衝動を覚えざるを得ない。それによって「幽霊」のように、あるいは（似たような例をあげれば）「トウィックナム庭園」のように詩を読む力が養われるのである。「トウィックナム庭園」では話者が庭園に愛を持ち込んだ自分を「自らを欺くもの」と言いながらそれでも「愛するのを止めない」⁹²⁾と言う。

一見話者は自己矛盾には気づいていないようだが自分がそれまで言ったこと全てをはっきり拒否している（ように見える）ところが他にあり、「女の貞操」を取り上げてみる。

さてこれで君は丸一日僕を愛してくれたが
明日別れる時は何と言うのだろうか。
新しく立てた誓いは昔のことだとも言うのだろうか。
それとももはや私たちは
あのときの私達とは違いますというのだろうか。
それとも、愛の神を敬い、その怒りを恐れて
交わした誓いは誰でも捨ててよいというのだろうか。
それとも真の死が真実の結婚を解消するように

結婚の写しに過ぎない恋人同士の約束は
 死の写しの眠りから覚めれば解消するとしても。
 それとも自己弁護のために
 変節と浮気をもくろんでいたのだから
 変節が節操なのだとでも言うのだろうか。
 愚かで浅はかな女よ、そんな言い訳には反論もし
 言い負かすこともできる。やろうと思えば。
 でもやめておこう
 明日になれば僕もそう思うかもしれないからだ。⁹³⁾

ウィルバー・サンダースはこの詩の解釈で女性は「売春婦」⁹⁴⁾ だときっぱり言うが、しかし、そんなに浅い詩ではない。実際この女性は不実なのか？朝になって女性が彼のもとを去ることを非難されるのは全くいわれのないことで、非難は話者自身の不安感や敵意から生まれたものでしかなくとも知れない。彼が彼女と別れるかも知れないという彼の予告もまた結局は確実なものではないかも知れない。いかに彼女に深く心を奪われているかを彼女に知られたくないので自分から彼女と別れるのは当然と思われぬように用心しているのかも知れない。あるいは別の見方をすれば話者の感情の表われ全てが自らの変節をおおい隠しているのかも知れない。女性ではなく彼が朝別れるつもりなのかも知れない。いずれにしても変節の議論を考え出したのは女性ではなく彼なのである。女性に対する攻撃は単に彼女を追い払う一つの方法であると同時に自らの正当性を訴える方法なのかも知れない。これらの読み方のいずれも選ぶ必要がないどころか、実際にはできないことだ。決定するにはもっと男性のことを女性のことを知る必要があるが、いずれも存在しない。あるのはただ詩を語る声だけでその中に変節と不安とが絶えず不安定に混ぜ合わされている。その声は決断に乏しいが生き生きとしており活気にあふれているが定まるところがない。ついでに言えば詩が示すこの一風変わった優柔不断な様子はダンにとっては極めて自然のことである。ダンは既に見たように人は変化する（「我々はかつての我々と同じではない」という考えを持っているが「一周年記念」のような詩ではそれを否定しようともしている。これらの衝動的な考えは「女の貞操」のようにこれらの考えを受け入れると同時に非難するような詩でのみ一致させられ得るのである。

「別れ：窓に書かれた僕の名前に寄せて」の終わりの変化はまた違う。というのはずっと読んできた詩の内容を突然無視して単なる振りだと否定するからである。ガラスに刻まれた骸骨と不在の間に想定される恋敵に対して彼女を取られないようにしなければならぬという考え——事実これがこの詩全体の骨組みなのだが——は無意味で、そのことは話者も承知している。

しかし、ガラスや文字は
 二人の堅固で変らない愛を守る手段とはならない。
 死にかけているので、気が遠くなり
 夢の中でこんなことを言っただけ。

こんなたわごと，旅にでかけるせいだ。

死にゆく者がよく口にするものだから。⁹⁵⁾

ここでダンは劇的な口調に鋭い感受性を伴わせている。この連は我々を現実へ、堅固で変わらない愛へと呼び戻してくれる。今まで言ったことを率直に撤回して不安はなくなっているのだが、不安の声はこの詩全体に表されており消えることはない。不安を無視しようとするほど不安の強迫観念が一層明確になる。最終連はそれ以外の連と対立しているので最終連以外の威勢のよさが空騒ぎのように思わせることになる。従って話者はその自信を我々に確信させるようなものが何もないと弁解口調になってもたつくのである。不安は安心の反対ではなく安心の影だと言うことをダンは示している。

この章の目的は変化はダンにとって知的創造的可能性に満ちたものであることを示すことであった。同時代人と同様変化と向き合う時には憂うつや苛立ちを示し勝ちであったが、変化はダンにとって本質的に結びついて離れることのないものであった。変化は世界と彼自身に関する解釈を容易にするものであり、想像力をかき立てるものであった。心が働きかけるあらゆる現実の領域を全て包含しかつ結びつけられるだけの広い多様な関心をダンに与えたのである。また、変化は丁度『歌とソネット』のテーマや作風、詩集中の多様な姿勢を決めたようにダンが夢中になった神学的問題とそれに取り掛かる教義上の立場を決めるのに役立った。曲折はあるが解りやすい方法で彼の道徳的・社会的関心に影響を与えてもいた。例えば、誰もが職に就くべきだという主張は不変に対する情熱と関係がある。不変は変化に対する強迫観念から直接生じるもので、この二つは交互に彼自身の無目的や自己矛盾と結びついており、世界をお創りになった時神は無を有に変えられたという考え方に興味を持ったことと関連がある。この最後の考え方が職に就くことと結びつくわけではないが、職を持って何者かに変ることは無であった時に有に変えて下さった神に報いるのに唯一ふさわしいことだと言ってダンは繰り返しその関係を詳しく述べている。この考え方は空想ともいえるような想像力を使って非合理的ではあるがしっかりと道徳的確信に裏打ちされていることの例証である。

自らの変りやすさにダンが当惑していなかったとしたら、変化はこれほどダンの考え方の中心とはなっていなかったであろうと思われる。十八才の時に描かれた細密肖像画のモットーは熟慮の末に選り出されたもので既にダンの本質を示すものであり、モットーのあいまいさはモットーに対するダンの複雑な反応を示唆している。それは引き続きダンの生涯の自己省察の中心となった。会衆に向かって「わたしの心全てがここにあるわけではありません」と告白するダンと『歌とソネット』を書いたダンとは同一人物であり、従ってダンは自らを『歌とソネット』に見られるいかなる人物の思想や姿勢にも吸収されないようにすることができたのである。詩中の変りやすい矛盾した声は究極的には彼の個人的性格によるものである。これは詩の見せ掛けや修辞上の巧みな操作に属するものではなくダンという人そのものに属しているのである。

-
- 58) 『危篤時の信心』 77ページ (「瞑想 XII」)
 - 59) G. サンプソン編 『叙情民謡集』 1930年 26ページ
 - 60) 『説教集』 第9巻 176ページ
 - 61) 『エレジー』 8・4ページ
 - 62) 『説教集』 第5巻 314ページ
 - 63) ミルトン A. ルゴフ著 『ダンのイメジャリー 創造源の研究』 ニューヨーク 1962年 61ページ
 - 64) A.E.ウエイト訳 パラセルサス著 『ヘルメスの錬金術的著作』 1894年 第1巻 92ページ
 - 65) 『説教集』 第1巻 163・272ページ
 - 66) 『祝婚歌』 12ページ
 - 67) 『風刺詩』 95ページ
 - 68) 『説教集』 第7巻 410ページ
 - 69) 『自殺論』 155ページ
 - 70) プリニー著 『自然史』 第33巻 19ページ
 - 71) 『説教集』 第3巻 148ページ, 第5巻 124ページ, 第6巻 57ページ, 第7巻 403ページ, 第8巻 119~120ページ
 - 72) 『エレジー』 63ページ
 - 73) A.ロバーツ, J.ドナルドソン共編 タータリアン著 『反ニケア キリスト教文庫』 第15巻37章「魂論」 エディンバラ 1870年
 - 74) 『祝婚歌』 52ページ
 - 75) W.H.ヘンリー編 フローリオ訳 モンテニュー著 『エッセイ』 1893年 第2巻 331ページ
 - 76) 『祝婚歌』 68ページ
 - 77) 『エレジー』 50ページ
 - 78) 『エレジー』 64ページ
 - 79) 『エレジー』 51ページ
 - 80) 『エレジー』 75・89ページ
 - 81) D.L.ピータソン著 『ワイアットからダンまでの英国抒情詩』 プリンストン ニュージャージー 1967年 305ページ
 - 82) A.J.スミス著 『ジョン・ダン 記念祝賀論文集』 「愛の放棄」 1972年 89~131ページ
 - 83) 『エレジー』 61・36・58ページ
 - 84) T.S.エリオット著 『ジョン・ダン』 *Nation and Athenaeum* 33 1923年 331~332ページ
 - 85) オルダス・ハックスリー著 『ベン・ジョンソン』 *London Mercury* 1 1919年 186ページ
 - 86) ヴァージニア・ウルフ著 『通俗読者 第2シリーズ』 1932年 24~39ページ
 - 87) ゴス, 第1巻 171・197ページ
 - 88) 『説教集』 第6巻 41ページ
 - 89) 『エレジー』 43ページ
 - 90) D.L.ガス著 『ダンのペトラルカ主義』 *JEGP* 64 1963年 17~28ページ
 - 91) ホーソン著 『緋文字』 第24章
 - 92) レオナード・アンガー著 『ダンの詩と現代批評』 ニューヨーク 1962年 54・72ページ等参照
 - 93) 『エレジー』 42~43ページ
 - 94) ウイルバー・サンダース著 『ジョン・ダンの詩』 ケンブリッジ 1971年 46ページ
 - 95) 『エレジー』 66ページ

(2008年12月3日 受理)